

## ラット漿膜系リンパ管排導路およびその漏出について

柴田 真治<sup>1</sup>, 山口 真司<sup>2</sup>, 市原 伸恒<sup>2</sup>, 浅利 昌男<sup>2</sup>, 早川 敏之<sup>3</sup>

<sup>1</sup>関動物病院, <sup>2</sup>麻布大学・解剖学第一研究室,

<sup>3</sup>東京慈恵会医科大学・解剖学講座第一

腹部癌（腫瘍）の他部への転移経路を把握する研究の一環として、前回に引き続き今回は漿膜系排導路およびその漏出の経時的変化について調べた。方法は1つの時系列につき3匹のラット（Wistar-Imamichi）を用い、3分、1時間、2時間、4時間と経時的に観察を試みた。ラットのリンパ管走行について詳細に調べた報告には妹尾（1981）の報告が認められる。妹尾の報告によると、横隔膜のリンパ管排導路には①横隔膜、肋間から起こり腹側を内胸動脈に沿い上前縦隔リンパ節内側群に注ぐ経路、②横隔神経あるいは後大静脈に沿って胸郭前口に向かい、上前縦隔リンパ節内側群に注ぐ経路、③胸椎側リンパ管幹に注ぐ経路が左右各々に認められ、それらに加えて腹腔動脈領域のリンパを集めている腹腔リンパ節、および不定なリンパ節である乳び槽リンパ節を介して大動脈右側に併走する胸管の起始部に注ぐ経路の計7つの排導路が報告されている。今回の実験の結果、先人の報告と比較し、次のようなことが示唆された。

- ① 横隔膜から吸収されたものを排導する経路で最も優位に働くのは内胸動静脈に沿うリンパ管の経路である。それらは同動静脈に伴い前縦隔リンパ節内側群に速やかに墨が流入していた。
- ② 腹側の内胸動静脈に沿うリンパ管、横隔神経に沿うリンパ管の経路ではさほど左右差は認められないが、背側の胸椎側リンパ管幹では右側のほうが優位に働く傾向が認められた。
- ③ 胸管への排導は1時間前後から始まると考えられ、7つの経路のうちでは最も排導が開始される時間が遅いことが分かった。
- ④ 漏出を示すものとして、時に頸部のリンパ節やリンパ管を経由して腋窩のリンパ節に墨が入っていることより、リンパ管の循環は一定ではなく、時として漏出を示すような状態などの経路の存在を示唆するような、中枢から末梢の方向に向かうこともあるという可能性が示唆された。